

## 平和を感じるために私達がすべき事

沖縄県立那覇国際高校二年 安田 応彦

あなたの中の平和とは何ですか。みんなが好きな時に好きな物を食べて、好きなことを好きなようにできる世界ですか。戦争はどうですか。学校で習ったから知っているという人もいるかもしれませんが。しかしそれは「事実」ですか。戦争を起こす国の多くは自国の武力行使を正当化します。その考え方や見方、伝え方も様々です。もちろん戦争が終わった後の「過去」の伝え方も。

私は今年の二月に二週間、交換留学生としてハワイに行きました。そこで平和学習として真珠湾攻撃で有名なパールハーバーを訪れ、平和についてディスカッションする機会がありました。そこで最初に真珠湾攻撃の博物館に行き、真珠湾攻撃が実際にどのようなものだったのかを学びました。私は真珠湾攻撃について日本の授業でも勉強し、ハワイに行く前にも本を読み込んで勉強したつもりでした。その時学んだ正直なところは、真珠湾攻撃の非はアメリカにあつて日本はそこまで悪くないというイメージでした。しかしハワイの博物館には、日本に非がある部分について多くの展示がなされていました。さらに、日本の非だけでなく、自国のアメリカに非がある部分についても詳細な展示や説明がなされていることに驚きました。実際に起きた悲劇に対し、当時の道具等を豊富に展示しながら、第三者の視点で双方の立場や背景を明確に示している点に感銘を受けました。自国を良く見せようといった意図を全く感じない、過去の歴史から学ぶ姿勢が印象的で、自然と自分の戦争に関する学びを顧みる時間となりました。

そしてその後に行ったUSS ARIZONA MEMORIALで、一生忘れられない光景を目にすることになりました。快晴の空の下、海を眺めると何かきらきらと光っているものが海の上を漂っていました。直感的にそれが七十年以上前に沈んだUSS ARIZONAの船のオイルだとわかりました。とても不思議な感覚で、ありえないと思う思いもありましたが、自然と黒いオイルから七十年以上前の風景が見えてくるようでした。体験者の話からそれが本当に「黒い涙」と呼ばれている。七十年以上前に沈んだ船の燃料だと知り、想像を絶する圧力に言葉を失いました。未だに消えないオイルは、その下で沈んでいる千百二人の尊い命、数え切れない悲しみの涙を象徴していました。深い悲しみと共に、「平和」について考えていくためには、座って学ぶだけでなく、現地で自分の目で見て、耳で聴いて、肌で感じなければわからないことがあると確信しました。五感で「感じる」ことが深い理解につながるのだと、本当の意味でわかった瞬間でした。

沖縄に帰ってからすぐ、沖縄平和祈念公園に足を運びました。平和祈念資料館のブースで資料を読み込み、気づいたら一日を資料館で過ごしていました。これまで学校の行事などで幾度となく訪れていた場所でしたが、その当時は資料館の写真や資料を眺め、戦争の惨禍を学びながらも、どこか遠い出来事のように感じていたと思います。自分の中でどこか他人事だった目の前の写真や資料、証言がハワイでの体験を経て初めて自分の中で本当に意味を成しました。自分とは関わりがなかったハワイの地で、これまでにないほど「戦争とは何か」「平和とは何か」を考えている自分。沖縄という地で生まれ育ち、幼い頃から戦争や平和について考えてきたつもりでも、本当に自分の中で結び付くタイミングは今だった。パールハーバーの黒い涙は、文字や写真だけを見てわかった気になるのではなく、当時の方々の見に起きた事実を「感じる」との大切さを伝えてくれました。そして、立場や視点を変え、外から自分を見つめ直してみることで、ハワイから日本、沖縄を見つめることで、パールハーバーの黒い涙と沖縄の地上戦が自分の中でつながりました。

晴天の空の下、パールハーバーの海に浮かぶ黒い涙は、夏空の下で暗くたたくむ防空壕と重なります。今ある「平和」というのは、実は温かいブラックホールと隣り合わせなのかもしれません。戦争を経験したことのない私たちにとって、基地の問題、戦争を体験した方の壮絶なお話はとても重く、時にその大きさから目を背けたくなるところがあります。学んでもすぐには自分に引きつけられないこともあります。しかし私は、痛みや傷を見ないようにして、自分と相手を分け自分の非を見ないようにして、いつしかブラックホールの中でまた誰かを攻撃する、そんなことを繰り返したくない。戦争による実際の傷の痛みがわからなくても、痛みや傷、過ちと向き合って、自分から「感じる」ために行動したい。「感じる」タイミングが来るまで行動し続けたい。戦争で黒い涙を流した方には「これからの平和は私たちが作っていく」という希望に満ちた笑顔を望んでいると思うから。